

【夢殿】ゆめどの

かつて法隆寺東院にて「このお堂に聖徳太子がお籠りになり、夢を見て悟りを開かれたため夢殿と呼ばれるようになりました」という修学旅行生を引き連れたバスガイドさんの美声を耳にしたことがあります。

勿論、夢殿建立は聖徳太子=厩戸皇子(574~622)の時代より1世紀以上後のことですのでこのようなことはありえません。

しかし、ガイドさんの説明は全く荒唐無稽とは言い切れません。法隆寺東院=夢殿の地は聖徳太子の住居、斑鳩宮があったところなのですから。

天平11年(739)僧行信が荒れ果てた太子の住居跡を見て心を痛め、八角円堂の建立を上奏したと『法隆寺東院縁起』に記されています。これが夢殿建立の始まりです。

当地発掘調査の結果、東院の地下から飛鳥時代の住居跡が確認され『東院縁起』の記載が裏付けられました。

八角円堂とは死者の菩提を弔うための建築様式です。円は天空を意味しますので故人を弔う堂の多くは円堂に造られています。石造建築ですと円の形成が可能ですが、木造のため八角、稀に六角に造り円堂とするのです。

東院には夢殿のほか聖武天皇后の橘古那可智[たちばなのこなち]の住居であった伝法堂・礼堂などあり、金堂や五重塔のある西院に次ぐ見所となっています。

夢殿をさらに有名にしているのが堂内の厨子に安置されている夢殿観音、別名救世観音です。永きに亘って秘仏(拝観を許さない仏像)であったところ、明治政府の御雇教師としてアメリカから来日し、日本美術の調査をしていたフェノロサが祟りを畏れる寺の反対を押し切って開帳させたということです。仏像を信仰の対象から文化財として観る時代の到来を告げる象徴的な出来事といえましょう。

厨子を開帳すると全身白い木綿の布で被われた夢殿観音が現れたそうです。

(Ernest F. Fenollosa 『Epochs of Chinese and Japanese art』)

クスノキによる造形に金箔を施す、金堂釈迦三尊像や百済観音像より重量感のある夢殿観音には飛鳥様式でありながら次代奈良様式の兆しが見てとれます。

奈良時代の堂になぜ飛鳥時代の仏像があるのか不思議ですよ。太子の住居跡にあったとする研究者もいますが、荒れ果てた住居にこれだけの大作を保存することは無理というものです。

他の寺から移座してきたのかもしれませんが。仮にそうなら、フェノロサが見た全身に巻かれた布は移座してきたときのままの姿ではないでしょうか。今日でも仏像の運搬には全身に布を巻いて行います。

さて、この夢殿観音は夢殿創建の頃から聖徳太子の姿だといわれています。

天平宝字五年(761)の『東院資材帳』に「上宮王等身観世音菩薩」、『東院縁起』に「御影 救世観音像」と記されているのです。

これらの史料より1世紀以上古い西院金堂の本尊釈迦三尊像の光背銘にも「釈像尺寸王身」と記されています。釈迦三尊像は太子の死の直後に造られましたので、太子は死後すぐに仏様と同格

に崇拝されていたということになります。

巨大な仏像を歴代皇帝の似姿に見立てて権威・権力を示そうとした例は中国北魏の雲崗石窟に見られますが、太子の場合、政治的威圧感はなく文化的偉業を敬ってのことであり、北魏の例とは趣を異にします。

法隆寺といえば茶の湯に関わる思い出があります。

私がお茶を習い始めて間もないころ、奈良の道具屋さんで「法隆寺の裏手の土で焼かれた茶碗」を見せて戴きました。いつだれが焼いたものかわかりませんが箱にそう書かれていました。持ち合わせもなく求めずに帰りましたが、少し心は動きました。

実は法隆寺五重塔塔本塑像群(奈良前期)と同質の粘土層が「法隆寺の裏手」にあるからです。付近には七世紀後半から八世紀初の瓦片を出土する三井瓦窯跡があり、おそらく斑鳩の寺々の瓦もその土を用いたものと思われる。

あの茶碗はそんなこととは知らず粘土層を見つけた近世の陶工が造った物ではないでしょうか。お持ちの方がいらっしゃいましたら一服お誘い戴ければ幸いです。

夢殿 <http://www2.pf-x.net/~sanraku/kansai19/images/0061.htm>

夢殿救世観音像

<http://www.linkclub.or.jp/~qingxia/cpaint/nara/horyujiguse1.jpg>

金堂釈迦三尊像 <http://www.k2.dion.ne.jp/~ty8817/newpage64.htm>

百済観音像

http://tokyo.cool.ne.jp/nara_hakken/bunkazaijisya/980920kuzarakannon.htm

五重塔塔本塑像 <http://www.kcn.ne.jp/~kingyo/G0JYU.htm>

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~